

就学義務猶予免除者等の中学校卒業程度認定試験

平成 29 年度 国 語 (40 分)

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は全 17 ページです。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの^{らくちょう}落丁・^{らんちょう}乱丁及び汚れ等に気付いた場合は、手をあげて試験監督者に知らせなさい。
- 3 試験開始の合図の後、受験地、受験番号、氏名を解答用紙に記入しなさい。
- 4 解答は、各設問の指示に従い、全て解答用紙の解答らんに記入しなさい。
- 5 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってかまいません。

4 次の□の中に共通してあてはまる言葉は何か。それぞれのアからエまでの中から一つずつ選び、解答らんの記号を○で囲みなさい。

① □を向ける □に流す □と油 □をさす

ア 水 イ 火 ウ 川 エ 口

② ① 図に □ 波に □ 相談に □ 調子に □

ア みる イ かく ウ のる エ でる

5 次の①と②の()にあてはまる言葉はどれか。後のアからエまでの中から一つずつ選び、解答らんの記号を○で囲みなさい。

① 私が先生のお宅まで()。

ア くださります イ いらっしゃいます ウ おっしゃいます エ うかがいます

② 先生が私の絵を()。

ア いただく イ 拝見する ウ ご覧になる エ お召しになる

次は、チョコレートの方について述べた文章の一部である。この文章を読んで、後の1から6までの問いに答えなさい。記号で答える問題は、それぞれ、アからウ、あるいはアからエまでのの中から適切なものをつつ選び、解答らんの記号を○で囲みなさい。

A

一方、チョコレートづくりには、カカオの産地ではできないこともあります。「飲むチョコレート」はアステカ帝国でもつくっていましたが現地ではできませんが、問題は「食べるチョコレート」。カカオの産地である熱帯雨林地方は気温が高いため、ココアバターが固まらないのです。

それはそうでしょう。カカオ豆に含まれるココアバターは、カカオにとって重要な栄養分です。それが固まってしまうと、カカオ豆は発芽できません。だからこそ、気温の高い地域でカカオが育つのです。

「食べるチョコレート」が作られるほど気温の低い土地では、そもそもカカオが育ちません。原料であるカカオの産地でチョコレートがつかれないのですから、いささか皮肉な話だともいえるでしょう。熱帯雨林地方で採集したカカオが気温の低いヨーロッパに持ち込まれたから、ココアバターを固めて「食べるチョコレート」をつくれるようになったわけです。

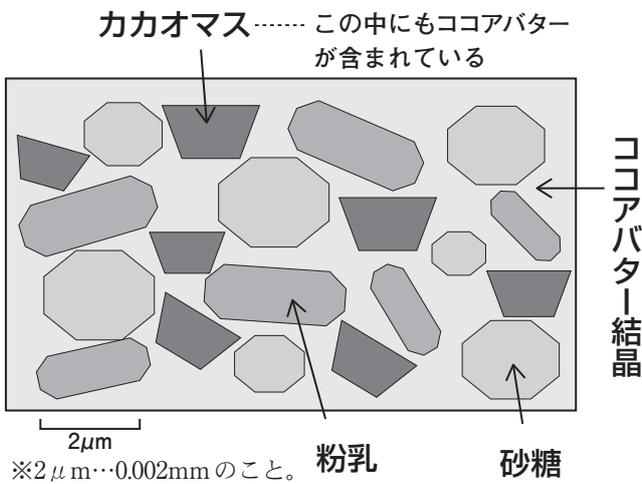
ちなみに、ココアバターが溶ける温度は、二八〜三三℃。この性質が、「食べるチョコレート」を可能にしました。

ここで、チョコレートの大きな構造を見てみましょう(図1)。

チョコレートには、ココアバターと砂糖のほかに、カカオマスも入っています(脂を搾り取る前なので、このカカオマスにもある程度はココアバターが含まれています)。チョコレートの色合いを決めているのが、このカカオマス。カカオマスが多いほど、濃いチョコレート色になります。ですから、いわゆるホワイトチョコレートには、カカオマスが入っていません。

余談になりますが、カカオマスがないぶん、ホワイトチョコレートは脂分が多くなる

図1 チョコレートの構造

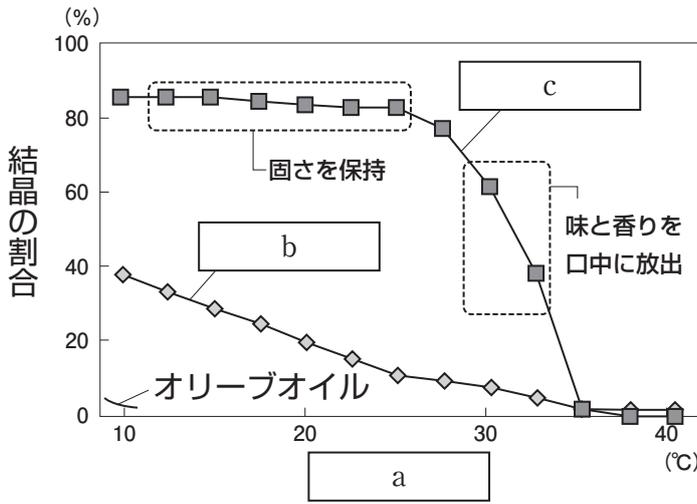


ので、ふつうのチョコレートよりも太りやすいといえるでしょう。脂の摂取を気にする人は、カカオマスを多く含む色の濃いチョコレートを選んだほうがベター。また、粉乳入りのミルクチョコレートより、ミルクなしのダークチョコレートのほうがヘルシーです。

B

さて、話をココアバターに戻しましょう。なぜ、チョコレートにはココアバターを使うのでしょうか。チョコレートなのだからカカオの脂を使うのが当たり前といえは当たり前なのですが、カカオマスが入っていれば、チョコレートの風味は出すことができます。ならば、それを閉じ込める脂の部分は、必ずしもココアバターでなくてもいいでしょう。ほかの油脂を代用品として使うこともできそうです。

図2 ココアバター（カカオ脂）の融解特性



(3) 結論からいえば、チョコレート独特のテクスチャーを出すには、やはりココアバターを使わなければなりません。ココアバターには、ほかの脂にはない特殊な性質が備わっているからです。

その性質を知るために、ココアバターとほかの脂を比較したグラフを見てみましょう(図2)。横軸は温度(右に行くほど高い)、縦軸は「結晶の割合」です。

結晶についてはのちほど改めてお話ししますが、ここではとりあえず、「固体は結晶の割合が高いほど固い」と思ってください。逆にいうと、結晶の割合が少ないほど、物質は液体に近づきます。つまりこのグラフは、それぞれの脂が「温度が上がるにつれてどれぐらい溶けるか」を表しているのです。

オリーブオイルが低温でも溶けている(結晶の割合が低い)のは、実感としてよくわかるでしょう。室温でも、台所のオリーブオイルがビンの中で固まることはありません。

それにくらべると、バターは結晶の割合がかなり高くなっています。とはいえ、それでも結晶が占める割合はおよそ四〇%。冷蔵庫の中では固まっていますが、構造的には半分以上が「液体」です。しかし、それを結晶が支えるようにして全体としては固

体の状態を保っているので、冷蔵庫から出してもすぐには溶けません。

ところが、温かいトーストや熱したフライパンなどに乗せると、バターはすっかり「液体」になります。グラフを見れば、温度の上昇につれて徐々にやわらかくなってゆき、四〇℃前後で結晶がほとんどなくなるのがわかるでしょう。

C

それでは、ココアバターはどんなふうに溶けるのでしょうか。グラフを見ると、低温での結晶の割合がバターよりも高く、温度が上昇してもしばらくはその割合があまり変わりません。二五℃ぐらいまでは八〇%以上が結晶で、固体の状態を保っているわけです。しかし二五℃を超えたあたりから、ココアバターは溶け始めます。さらに三〇℃を超えると、一気に結晶の割合が減少する。この落差が、チョコレート独特のテクスチャーの秘密にほかなりません。

チョコレートは、食べる前はしっかりとした固体なので、手でパキンと割れる「スナップ性」があります。しかし口の中は温度が高いため、食べ始めるとトロリと溶け始める。グラフを見ると、人間の体温(三五〜三六℃)ぐらいになると、ほとんど結晶がなくなるのがわかります。

もし、ココアバターまよの融解特性が牛乳でつくったバターと同じようなものだったら、私たちはチョコレートを手に持つことができないでしょう。形がすぐに崩れてしまいますし、手にもベタベタとくっつきます。一九世紀のイギリス人も、そんな脂で固形の「食べるチョコレート」をつくらうとは思わなかったに違いありません。

でも、ココアバターは(ヨーロッパなら)室温でも固形を保つ性質を持っていました。しかも口に入れたとたんに溶け出して、閉じ込められていたカカオマスや、砂糖などの風味が唾液と接することで舌の上に放出されます。チョコレートは、ココアバターがこのような融解特性を持っているからこそ「美味しい」のです。

(上野の 聡「チョコレートはなぜ美味しいのか」による。)

(注1) アステカ帝国……五百年ほど前に、今のメキシコのあたりにあった国。

(注2) テクスチャー……ここでは、口当たりのこと。

(注3) 融解特性……溶け方の特徴。

1 皮肉な話 とあるが、どういうことか。

ア 「飲むチョコレート」をアステカ帝国でつくっていたこと。

イ ココアバターがカカオにとって重要な栄養分であること。

ウ 気温の高い地域では、カカオが育たないこと。

エ カカオの産地で「食べるチョコレート」がつかれないこと。

2 チョコレートの大まかな構造 について、図1と本文に基づいて、正しく説明したものはどれか。

ア ココアバターは、カカオマスなどを閉じ込める働きをしている。

イ チョコレートはカカオマスとココアバターのみで出来ている。

ウ カカオマスのほかに、砂糖や粉乳にもココアバターが含まれている。

エ チョコレートの色合いは、カカオマスが多いほど薄くなる。

3 (3)にあてはまる言葉は何か。

ア また

イ しかし

ウ だから

エ なぜなら

4 ココアバターとほかの脂を比較したグラフを見てみましょう。とあるが、図2の a・b・c にあてはまる言葉の組合せとして、正しいものはどれか。

- | | | | | | | |
|---|---|----|---|--------|---|--------|
| ア | a | 固さ | b | バター | c | ココアバター |
| イ | a | 固さ | b | ココアバター | c | バター |
| ウ | a | 温度 | b | バター | c | ココアバター |
| エ | a | 温度 | b | ココアバター | c | バター |

5 美味しいとあるが、筆者がチョコレートを「美味しい」と考える理由を説明した次の文の（ ）にあてはまる言葉を文章の中から探して書き抜きなさい。

食べる前はしっかりとした固形なのに、口に入れたとたんに溶け出して、砂糖などの（ ）が舌の上に放出されるから。

6

A

 \hookrightarrow

C

 に入る、各段落の見出しとして適切なものはそれぞれどれか。

- ア オリーブオイルとバターはどのように溶けるのか
- イ 熱帯雨林地方で「食べるチョコレート」がつかれない理由
- ウ ほかの油脂にはないココアバターの特性

3

次の文章を読んで、後の1から6までの問いに答えなさい。記号で答える問題は、それぞれのアからエまでのの中から最も適切なものを一つずつ選び、解答らんの記号を○で囲みなさい。

相野美由(あいのみゆ)は、中学二年の秋、情熱を注げないまま吹奏楽部を辞めた。しかし、高校に入学し、ユーフォニアムを担当する同級生の菰池くんから入部の誘いを何度も受ける。その結果、同じく乗り気ではなかった、ドラムが得意な同級生の久樹さんとともに吹奏楽部に入る。

夏の県大会に向けてパート練習に励んでいたある日、初めて最初から最後まで曲を止めずに、全体での合奏が行われた。その帰り、三人はバス停に向かっている。

歩きながら、ぼそぼそとおしゃべりする。

フルートの新生はほとんどが経験者で、ぎこちないながらも何とか、第一楽章のパートは吹き終えられた。ユーフォニアムの方は、初心者が多く、とてもそこまでいかなかったそうだ。

「パーカッションはどう？」

久樹さんに顔を向ける。

パーカッションを希望した一年生は、久樹さんを含めて三人いた。

「うん。みんな、そうみたい」

久樹さんが短く答えた。

新入部員全員が経験者だったという意味だろう。

「え？ そうみたいって、どういうことだよ」

久樹さんではなく、あたしの顔を覗き込んでくる菰池くんを無視して、さらに尋ねる。

「久樹さん、パーカッションの何を担当することになったの」

「ドラム」

「バスもスネアも？」

軽く頷いただけで、久樹さんはどんどん歩いて行く。久樹さんは、他人の歩行に合わせて、足取りを緩めたり速めたりはしない。いつも、自分のペースで歩く。わざとそうしているのではなく、他人に合わせるなんてことをまったく考えていないのだ。たぶん。

パーカッションのリーダー、香山^{こうやま}さんは例の栗色の髪の美女だ。いかにも勝ち気そうな雰囲気、きりつとした面立ち^{おもた}をしている。大丈夫かな。

ふっと思つた。

この性格とあれほどのパーカッションの才能。先輩から疎まれる条件としては十分過ぎる。しかも、香山さんもさうとう気が強いみたいだし……。

「ねえ、久樹さん」

あんまり我を張つちや駄目だよ。意地を張つちや駄目だよ。いいことなんか一つもないんだから。そう忠告しようかと、あたしは軽く息を飲み込む。ほぼ同時に、久樹さんが足を止めた。

「あたし、ほとんど経験ないから」

空を見上げ、ぼそりと呟く。

「え？ 久樹さん、そんな大胆な告白、急に言われても……。実はおれだって、ほとんどどころか、まっ、まるで経験なんてなくて……」

菰池くんが熟れすぎた林檎^{りんご}みたいな顔色になった。額に汗まで浮いている。あたしは、本気でため息なんか吐いてしまった。ほろりと口から零れ出ってしまったのだ。

「何、変なこと考えてんのよ。久樹さん、吹奏楽の経験がないって言ってるの」

「え？ あ……そっちな。よかつた」

菰池くんは胸を撫で、爽やかな笑顔を作る。

この人、本当に天然だ。厄介で面倒くさくて、ちょっとだけかわいい。どんな演奏するんだろう。

久樹さんの方は、菰池くんにも菰池くんの言ったことにも、ちらつとも注意を向けなかった。

「だから、すごく新鮮だった」

「今日の練習が」

「うん、驚いちゃった」

「何に驚いたの」

久樹さんと会話していると、一言一言を丁寧^{ていねい}に拾^{ひろ}っていく癖がつく。それは厄介でも面倒でもなくて、ちよつとずつ蓋^{ふた}を開けて、宝箱を覗き見るようでおもしろい。

久樹さんは首を傾^{かし}げ、暫^{しばら}く黙^{もく}り込んだ。

あたしたちは、黙^{もく}ったまま歩く。

傍^{かたわ}らを通り過ぎる男子生徒が、時折、「よつ、菰池。美女に挟^かまれていいな」とか「おまえモテ過ぎじゃん」とか、からかいの文句を投げつけていく。まあ、からかいたくなるシチュエーションなのは確かだが。今までのあたしなら、身を縮^{ちぢ}め、目を伏^ふせていただろう。でも、このごろ、そんなに気にかからなくなった。二人にかなり感化^かされてきたのだと思う。

菰池くんは「よつ」とか「ほつとけよ」なんて平気で返事^{へんじ}をしているし、久樹さんは、まさに一顧^{いちこ}だにしない風で、前を向いている。周りを気にするより、久樹さんの言葉を聞きたい。そちらに、気持ちを集^あまる。

バス停が見えてきた。

久樹さん、お願い。早くしゃべって。

久樹さんが視線^{しせん}をバス停に並ぶ列^{れい}に向けた。それから、科白^{せりふ}を手繰^{たぐ}り寄せるようにゆつくりと言^いった。

「何か、積み木^{積みぎ}みたいだったから」

「積み木^{積みぎ}？」

これは意味^{いみ}がわからない。今度は、あたしが首^{くび}を傾^{かし}げる番^{ばん}だった。

「ああ、積み木^{積みぎ}ね。なるほど」

菰池くんが指^{ゆび}を鳴^ならす。バチツと鈍^{どん}い音^ねしか出^でない。

「……どうということ？」

「だから、積み木なんだよ。各パートが三角とか四角とかの積み木で、それが合わさっているんな形になる。城とか、ロケットとか、ボールとかさ」

積み木でボールは作れないだろうと思ったけど、言い返さなかった。そんな些細なことはどうでもいい。

そうか積み木、か。『積み木』の一言が、すんと胸に落ちた。

パート練習の後、全体での合奏が行われた。普通なら、最初から曲を全部通すことはありえない。問題点が出てくるつど中止して、注意を伝える。指摘された点を該当パートが演奏して、また合奏に戻るといのが、全体練習の基本だろう。

でも、今日だけという限定で、顧問の小石先生は曲を止めないで全部、演奏させた。一年生に聴かせるためだ。

あたしの耳でも、メロディーと伴奏の微妙な、いや、かなりのずれや、音程のブレからくる「うなり」を聞きとれたぐらいだから、納得にはほど遠い内容だったろう。

それでも、胸に迫った。

課題曲も自由曲も、CDで何度も聴きはした。プロの演奏だ。ずれもブレも破綻もない。でも、あたしのすぐ前から発せられ、あたしを包み、あたしにぶつかり跳ね返る音にあたしは惹き込まれた。これが、生の演奏の迫力なのだ。それは、パート練習の充実感とは違う、大きなうねりの感情だった。

「あつ、こんな風に曲が出来上がっていくのかって、新鮮だった。びっくりした」

久樹さんの頬が上気している。それこそ、驚いてしまった。こんな風に昂ることのできる人だったんだ。久樹さんの高揚が理解できる。それが嬉しい。

「それで、さ」

菰池くんがひよいと前に出る。

「久樹さん、自分がどんな（ 3 ）かイメージできた？」

え？（ 3 ）のイメージ？ 何のこと？

天然の菰池くんが、また、意味不明のことをしゃべっている。そう思ったのに、久樹さんははつきりと首肯したのだ。

「うん、できたよ」

「そっか、さすがだな」

「自分がどこにいるのか、どんな形なのか色なのか大きさなのか、頭に浮かんだよ」

「そっか、さすがだな」

菺池くんは、まったく同じ科白を同じ息遣いで口にした。

動悸がする。

4 心臓がドクン、ドクンと大きく鼓動を打つ。

久樹さん、ちゃんと擱つかんでいるんだ。

全体の演奏の中で、自分の音がどこでどう生きるかを、既に擱つかんでいるんだ。イメージできるんだ。

あたしは、到底できない。楽譜にそって音を出すのがやつとなのなもの。全体の中の自分を意識するなんて、無理だ。

久樹さんとあたしは違う。久樹さんには天賦まるとんぶの才とやらがある。生まれたとき、天からの賜り物を受け取っている。だから比べても仕方ない……。わかってはいるけど、やっぱり焦あせってしまう。さっき、久樹さんが理解できると一瞬でも喜んだ。それが恥ずかしい。何て能天気なんだろう、と。

5 愛沙あいさの情熱も久樹さんの才能もないあたしは、また、置いていかれるんだろうか。

また、そんな暗めの思考に引きずられそうになる。

我ながら、後ろ向きだ。

こらっ、美由。いいかげんにしろ。

自分で自分を叱る。

「そっか、そっか、すげえな。さすがだな」

菺池くんは屈託なく、ただただ率直に感心していた。

「おれなんか、譜を追っかけるだけで、いっぱいいっぱいだもんな」

5 あたしは思わず、菺池くんを見上げていた。

そうなの？ ほんとに？ あたしと同じ？

菰池くんがあたしを見返した。唇がもぞつと動く。

「急げ！」

「はい？」

「バスが来たよ」

「ええっ」

緑色の車体のバスが停留所に停とまっている。人の列がそろそろと吸い込まれていた。

「やだ、乗り遅れちゃう」

あたしより先に菰池くんと久樹さんが走り出した。

「ストップ。ちよつと待て」

菰池くんがぐるぐると腕を回す。

「乗ります、乗ります、乗りまーす」

久樹さんが大声をあげる。

道行く人が立ち止まり、振り返った。

恥ずかしい。でも、あたしもバスに乗るのだ。他人事ひとことではない。「待つてくたさい。乗りまーす」。久樹さんに負けない声を張り

上げ、バス目がけて走った。菰池くん、久樹さん、あたしの順番で辿たどりつく。間に合った。

無事にバスに乗り込んだとき、全身から汗がふきだしていた。

「よかったね、間に合つて」

手すりにつかまって喘あえいでいるあたしに、中年の女の人が話しかけてきた。丸い顔いっぱいには笑みが浮かんでいる。

「はい……、何とか……」

口の中に汗が染みてくる。しょっぱい。

バスが発車する。

久樹さんは、もう涼しい顔で外を見ていた。菰池くんは、「やべっ、足、つつちやうかも」と、しきりに太腿ふとももを撫でていた。どうしてだかおかしくて、あたしは俯うつむいたまま笑い続けた。

(あさの あつこ『アレグロ・ラガツア』による。)

(注1)ユーフォニアム……金管楽器の一種。

(注3)バスもスネアも……バス、スネアはそれぞれドラムの種類。

(注5)首肯……もつともだと認めること。

(注7)愛沙……相野美由(あたし)の中学時代の吹奏楽部の友人。

(注2)パーカッション……打楽器の総称。

(注4)一顧だにしない……全く気にしない。

(注6)天賦の才……生まれつきもっている才能。

1 大丈夫1かな とあるが、「あたし」は何を心配しているか。

ア 自分たちがバスに乗り遅れてしまうこと。

イ 久樹さんが気が強い先輩と対立すること。

ウ 自分がこのまま吹奏楽をやっていくこと。

エ 菰池くんと久樹さんの仲が悪くなること。

2 本気2でため息なんか吐いてしまった とあるが、この時の「あたし」の気持ちはどれか。

ア 吹奏楽の経験がないという久樹さんに向かってしている気持ち。

イ 気が強く、先輩と対立する香山さんに怒りを感じている気持ち。

ウ 先輩に対して意地を張り続ける久樹さんを心配している気持ち。

エ 的外えのれなことを言っている菰池くんにあきれ果てている気持ち。

3 (3) にあてはまる言葉を文章中から探して、三字で書き抜きなさい。

4 心臓がドクン、ドクンと大きく鼓動を打つ とあるが、この時の「あたし」の気持ちはどれか。

ア 全体の演奏の中で、自分の音がどう生きるかを掴むことができ、喜ぶ気持ち。

イ 自分にも久樹さんと同じように、才能があることに気付いて、あわてる気持ち。

ウ 久樹さんと異なり、全体の中の自分の音を意識することができず、焦る気持ち。

エ 久樹さんの言っていることのすべてを理解することができて、うれしい気持ち。

5 あたしは思わず、菰池くんを見上げていた とあるが、その理由はどれか。

ア バスが停留所に停まっていることに気付き、菰池くんに急いで知らせたかったから。

イ さつきから同じような言葉ばかり口にしていて菰池くんのこと不思議だったから。

ウ 菰池くんも自分の音を掴んでいると思っていたのに、自分と一緒に意外だったから。

エ 久樹さんに感心している菰池くん、自分も久樹さんと同じだと伝えたかったから。

6 「あたし」にとって、久樹さんはどのような存在か。

ア 他人に流されず、独自の言葉で音楽を表現できるあこがれの存在。

イ 吹奏楽部内で互いに高め合えるライバルとして、唯一認められた存在。

ウ 楽器に対するこだわりが人一倍強いため、厄介で面倒くさい存在。

エ 互いの悩みを話し合うことができる、頼りになる姉のような存在。

4

修学旅行先の中学校と交流することになった山田さんは、自分が住んでいる町のよさを紹介しています。次は、【提示する資料】と【発表原稿】です。これらを読み、後の問いに答えなさい。

【提示する資料】

【発表原稿】

資料 1

海を感じる町

- ①海水浴に自転車で行ける
- ②新鮮な魚が毎日食べられる
- ③いつも美しい海が見られる

資料 2

住みやすい町

- ①
- ②
- ③

これから、私たちが住んでいる町のよさを二つ紹介します。

(資料 1 を提示しながら) 一つ目は、「海を感じる町」という点です。町の南には、広く太平洋を望む海岸があり、夏には、絶好の海水浴のスポットになります。ですから、私たちは、家から自転車で簡単に泳ぎに行くことができます。また、その時期になると、多くの観光客が訪れ、浜辺には出店が立ち並ぶので、とてもにぎやかになります。もちろん、近所の魚屋では新鮮な魚が手に入るので、毎日手軽に旬の魚が食べられます。町のどこからでも美しい海が見渡せて、私たちはいつも海を身近に感じることができます。

(資料 2 を提示しながら) 二つ目は、住みやすい町という点です。まず、交通の便がとてもよいことが挙げられます。地域に循環バスが走っていて本数も多いので、移動の手段に困ることがありません。新幹線が停まる駅にも近いので、遠くに出かける際にも便利です。市内には無料の駐輪場も多く設置されていて、中学生の私たちにとっても便利です。また町の中に大きなショッピングモールや商業施設があり、買い物や遊びの場所なども充実しています。しかも、住んでいる人たちのマナーに対する意識が高く、町全体が非常にきれいです。

以上のように、私たちが住んでいる町には、人々を引きつける魅力的な要素がたくさんあります。ぜひ、みなさんも一度遊びに来てください。

1 資料1の項目を、「海を感じる町」とした理由はどれか。

- ア 山田さん自身が海を感じられる町に住んでみたいというあこがれを強く持っているから。
- イ 実際に住んだことのある人から聞いた、海を感じることでできる内容を紹介しているから。
- ウ 町のよさとともに、海の近くで住むことが大変であるということを話しておきたかったから。
- エ 手軽に海水浴ができたり旬の魚を食べられたりと、身近に海を感じるができるから。

2 資料2の①から③にあてはまる言葉を、それぞれ七字以上、十二字以内で書きなさい。